



私は東京に生まれ育った

明確な形容は出来ないが、常々この東京という空間に対して不思議な愛着を感じている

では日本人にとって、東京という都市とはどんなかたちをしたものになるのだろうか

そもそも都市は日本に存在するのだろうか

東京は日本の都市とされるが、他国とは異なった様相を呈しているように感じる

人々にとって居心地の良い、愛される空間とは成っていない

の居る都市を見ている貴方を見ている私の居る都市を見ている貴方を見ている私の居る

一生きる余白とその周縁

## 都市の共有

「人々はそれぞれが自分たちにとってファミリアーな限定された場を繋ぐことによって、自分の都市、言い換えれば経験の経路としての都市を、いわゆる漠然とした下敷きの絵としての都市の上に刻印することによって、現在それぞれの「都市」を所有し共有しているのである。」  
横文彦氏「見えがくれする都市」



都市は歴史と物理的なレイアウトに、人々の行為の集積とその経路が繋がることで作られる。



共有する

都市の共有は、「アクティヴ・メモリー」つまり無意識の、身体的な記憶によって自覚なく引き起こされる行為を共通項として、各々の行為をもって行われている。



## 日本の都市



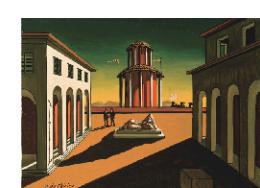
日本の都市は「すき間」が多い。これは都市を作り上げていく中で自然の存在が非常に大きかったためと考えられる。ここに日本独自のコンテクストが存在する

都市での体験や各々の思考を支える街路風景を構成しているのは西欧のように建物の壁だけではなく、板塀や庭に生える木や草花、軒下に並べられた鉢植え、陽にさらされた洗濯物、そういう自然や人の行為の痕跡も含まれる。建物の輪郭線ははっきりとせず、また建物同士の間は路地への出入口によって空隙が生じる。



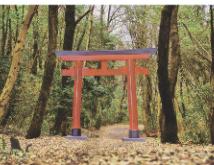
西欧は中心性と塔のある文化。日本は中心性と塔のない文化。

左：ショルジョ・デ・キリコ「夏の午後」  
右：歌川広重「名所江戸百景 愛宕下藪小路」



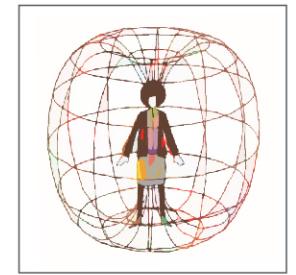
# 日本の 空間感

日本には特有の空間感が存在する。西欧の都市構造が日本人にとって居心地の良いものとなり得ないのは、この特殊な価値観が私たちの生き方の至る所に浸透しているためである



## 「間」と「余白」

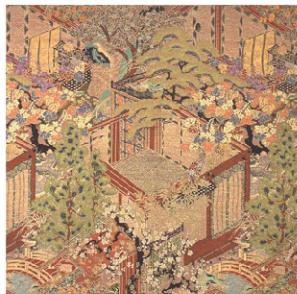
「間」はものがその空間に置かれることによって初めて立ち現れる。  
絵画ならば白紙の上に絵が描かれることによって  
初めて「余白」が生まれる。



## 「仮想領域 (Space Bubble)」

これによって他者との距離を測り関係性を作るが、日本人はその占有感が強い。  
それぞれの周縁が重なった空間を、不特定多数の人々が存在し得る共有空間と認識し、占有する場の延長と捉えられている。

道は様々な人々が互いにすれ違い共有する空間で、そこで過ごすことが当り前の風景だった。



## 非パースペクティブな国

吹き抜け屋台や浮世絵のように、  
時間軸として不連続なシーンが続く。  
歴史や時系列は重要視されず、  
ずっと「今」という瞬間が断続的に続いている。



## 自然信仰

日本の建物は庭へと繋かり、時に借景として建物に取り込む。

そして外の空間は全てそれ以外と認識している。

人工的な都市であっても、知らぬ間に増殖した自然と同じものを感じている。  
自然は制御するものではなく受け入れるものだ。



日本の地歴や、自然にある曲面を参考に、設計物のフォルムを決める

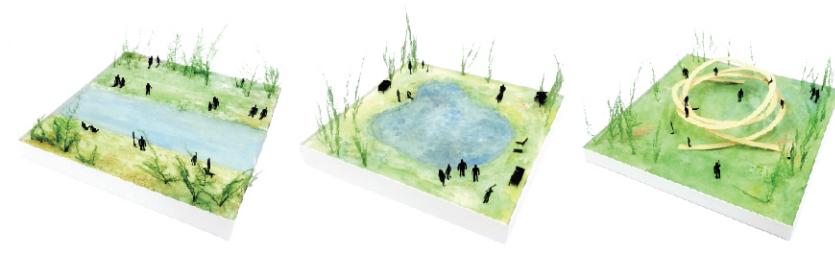


### 地歴

江戸城は江戸の象徴的な中心で、五街道と掘割でもって渦巻の構成が形づくられていることは分かるが、街道は江戸の微地形に沿って適宜曲げられて軸線も少しずつ異なっており、全体の求心性としてはそれほど強くない



敷地と馴染み、寄り添う設計にするため、坂倉準三氏の広場を造構とし、その周辺の地面から浮き上がる様な周縁をつくる。



川の向こう岸を望む  
浄土を望む

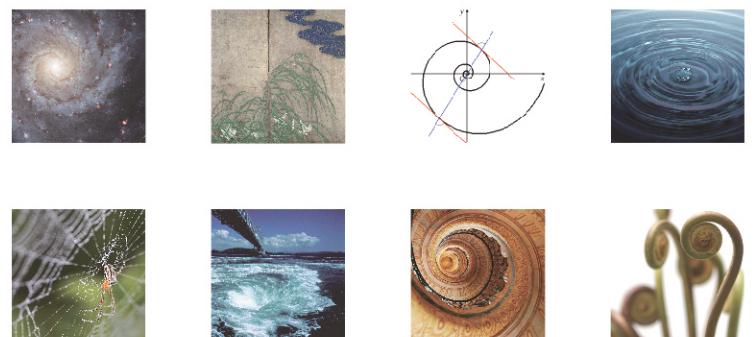
池のほとり  
縁に寄り添う心地よさ

ぐるぐる  
原初的なかたち

これまでの研究より、いくつかの手法をかたちに落とし込む。

自然の中には様々な曲面が存在する。

日本の都市にとって自然が重要であること、また本作はそれ自体が重要なではなく、敷地に新たな空間性を持たせる役割を担うため、有機的で、かつ曲線に強い意図を感じさせない設計を行。



プラン



平面図 S=1:300

▽21m

▽18m

▽15m

▽12m

▽9m

▽6m

▽3m

▽GL

▽3m

▽B1

立面図 S=1:100

